

音学シンポジウム 2018 開催にあたって

齋藤 大輔^{1,a)} 森勢 将雅² 塩田 さやか³ 木谷 俊介⁴ 小橋川 哲⁵ 高道 慎之介¹ 武岡 成人⁶
橘 亮輔¹

概要：2013年から始まった音学シンポジウムも本年度で6回目の開催となる。本稿では「音学シンポジウム 2018」について、その実施の趣旨や今後の展望について述べる。

1. はじめに

「音学シンポジウム」は、音に関するあらゆる学術分野をターゲットとして、シングルトラックによる招待講演とポスター形式による一般発表によって構成される学術イベントである。2013年5月に初めて開催され、今年が6回目の開催となる。本稿では「音学シンポジウム」の企画動機や趣旨の振り返りと本年のシンポジウムの概要、および将来の可能性について述べる。

2. これまでの音学シンポジウム

第一回の音学シンポジウム 2013 は、情報処理学会音楽情報科学研究会 (MUS) の 20 周年記念企画の 1 つとして企画され、2013 年 5 月 11 日、12 日にお茶の水女子大学で開催された。これまでの音学シンポジウムの中でも何度か紹介されているが、この企画は画像処理分野で日本国内において最も規模が大きいシンポジウムである「画像の認識・理解シンポジウム (Meeting on Image Recognition & Understanding; MIRU)」にインスパイアされて実現されたものである [1]。

これまでの音学シンポジウム全体で踏襲されている基本コンセプトが

- 音・聴覚・言語に関するあらゆる分野を対象とすること
- シングルトラックによって進行すること

の 2 点である。分野毎のセッションが別々の会場にて、パラレルに行われるような形式ではなく、あえてシングルトラックであらゆる分野を進行する事により、分野間での議

表 1 これまでの音学シンポジウムの変遷

開催年	日時	開催場所	ポスター発表数
2013	5/11-12	お茶の水女子大学	51 件
2014	5/24-25	日本大学	66 件
2015	5/23-24	電気通信大学	61 件
2016	5/21-22	東海大学	37 件
2017	6/17-18	お茶の水女子大学	47 件

論・交流をより活性化させようという狙いがある。

表 1 にこれまでの音学シンポジウムの変遷を示している。表 1 はポスターで発表された一般発表を示しており、これに加えて各回 12 件の招待講演・チュートリアル講演が企画された。5 年間ですでにのべ 250 件以上のポスター発表があり、また音学シンポジウム 2016 では、「MIRU 連携オーガナイズドセッション」が企画された。これは MIRU と連携し、音の研究者と画像の研究者とが 1) 信号処理と逆問題、2) 認識と変換、3) 応用とインタフェース のトピックについてトークバトルをするものであり大変盛況であった。またシンポジウムの参加者についていずれも 250 名をこえる参加者があり、盛況であったといえる。

3. 本年の音学シンポジウム

本年の音学シンポジウム 2018 は 6 月 16 日、17 日に東京大学にて行われる。2014 年の音学シンポジウムより、MUS 以外の多様な意見を積極的に運営に取り入れるため、実行委員会を立ち上げ、協賛研究会から 1-2 人ずつ参画する形式を採用している。本年は、昨年より協賛に加わった情報処理学会音声言語情報処理研究会 (SLP) が主催研究会に加わる形で、MUS と SLP の共催研究会の形式となった。またこれまで通り 3 つの研究会 (電子情報通信学会/日本音響学会 音声研究会 (SP)、電子情報通信学会 応用音響研究会/日本音響学会 電気音響研究会 (EA)、日本音響学会 聴覚研究会 (H)) が協賛研究会となっている。さらに本年

¹ 東京大学
² 山梨大学
³ 首都大学東京
⁴ 北陸先端科学技術大学院大学
⁵ 日本電信電話 (株)
⁶ 静岡理科大学
a) dsk_saito@gavo.t.u-tokyo.ac.jp

表 2 音学シンポジウム 2018 実行委員会

委員長	齋藤 大輔 (東京大学)
副委員長	森勢 将雅 (山梨大学)
副委員長	塩田さやか (首都大学東京)
委員	木谷 俊介 (北陸先端科学技術大学院大学)
委員	小橋川 哲 (日本電信電話 (株))
委員	高道慎之介 (東京大学)
委員	武岡 成人 (静岡理科大学)
委員	橋 亮輔 (東京大学)

の音学シンポジウムでは、上記研究会がカバーしきれていない生物音響分野の講演充実のため、東京大学の橋亮輔氏に実行委員として参画いただいた。表 2 に実行委員会の体制を示す。

音学シンポジウム 2018 では、一昨年より開始し好評を得ている招待講演とチュートリアル講演の組み合わせによるスロット構成をベースに、いくつかの時間帯に比較的柔軟な時間配分を設けることでより多様な講演体系を模索した。その結果として招待講演として次の 7 名の方々に招待講演をお願いすることとなった (順不同, 敬称略)。

- 堀川 順生 (豊橋技術科学大学・名誉教授)
- 小島 哲 (韓国脳科学院)
- 西野 隆典 (名城大学)
- 平野 徹 (東日本電信電話株式会社)
- 小泉 悠馬 (NTT メディアインテリジェンス研究所)
- 津崎 実 (京都市立芸術大学)
- 阪上 大地 (コルグ)

またチュートリアル講演についても、「招待講演のより深い理解」を目的に以下の 4 名の方々に講演をお願いした (順不同, 敬称略)。

- 黒田 剛士
- 森 千紘 (東京大学)
- 大谷 健登 (名古屋大学)
- 饗庭 絵里子 (電気通信大学)

これら計 11 件の招待講演・チュートリアル講演と、ポスター発表を通して音学のさらなる発展と交流ができればと期待している。ポスター発表は申し込み時点で 53 件の申し込みがあり、6 年間でのポスター発表件数は 300 件を超える見込みである。例年に負けない盛り上がり期待される。

4. これからの展望

6 年の開催を通して、音学シンポジウムも徐々に認知度を増している。一方である種の局所収束感も感じており、また昨今様々なところで議論されている、研究会のあり方にも目を向ける必要があるように思う。速報性を重視した分野でのプレプリントサーバの充実、翻訳技術の発達に起因する国際会議との差別化等についても考えなければならない。またシングルトラックの形式を維持しつつ、招待講

演と一般発表間のある種の“ギャップ”をどう埋めていくかも今後検討すべきことであろう。分野・学問・知の体系に音学シンポジウムがどのように寄与できるか、参加者・運営さまざまな立場の人間が考えていく必要があるように思う。

5. おわりに

「音学シンポジウム」も本年で 6 回目を迎え、少しずつ成熟しつつある。一方で幅広い「音に関するあらゆる分野」をカバーし、そこに交流を生むためには、これからも様々なチャレンジを行っていく必要がある。これからも、参加者各位とともに経験を積み重ね、よりよいシンポジウムを目指していきたいと考えている。

参考文献

- [1] 亀岡 弘和 他: “「音学シンポジウム 2014」開催にあたって”, 情報処理学会研究報告, 2014-MUS-103-1 / 電子情報通信学会技術報告, IEICE-SP2014-1, May 2014.